明治三十年二月十七日（日曜日）　河北新報　第二號　（一）

河北新報

紀元二千五百五十七年二酉歷十九百九十七年
陰歷丙申十二月十五日　昨日正午（晴）寒暖計　五十度

本紙定價（市外郵稅共）　金壹錢五厘　一ケ月前金廿五錢
廣告（五號活字十字詰一日一行）　金十三錢
慶賀（三日以上一割引）　金五錢
定價（七日以上二割引）

本月（大）日曜、三日、十日、十七日、廿四日、卅一日
每月日曜及大祭翌日休刊

發行兼印刷人　早井成緒
編輯人　橋本壯平
宮城縣仙臺市國分町二丁目四十七番地
發行所　河北新報社

河北新報の抱負

河北由來偉人多し、三百年前國南の鵬翼を奮はんとしたるは、河北の英雄獨眼龍よあらずや、夙よ殖産興業を奬勵し、交通運輸の便を開き、嬉々と教育文化の普及を圖りたるは、第四世肯山公よあらずや、驚世泰平の逸樂と昏酔するの時、決斷斷血國防の急務を唱へ、以て一代を警醒したるは、河北の豪傑六無齋よあらずや、孤棲鼇居釣の舊日本よ生れて夙よ開國進取の國是を唱道し、主義の爲よ一身を犧牲よ供したるは、河北の天下に於ける地位を觀察すれば、其政治上の權勢集して強大なるか、實業上の發達果して遲るゝ所なきか、忠勇義烈の士氣果して古への河北人士よ讓る所なきか、思ふて茲よ至れば轉た慨嘆よ勝へず、是れ今回河北新報か多大の天職を負荷して、青葉城下よ蹶起したる所以なり、

何をか河北新報の天職となす、責任内閣を完成して憲政の實を擧げ、外政を振作して國權國利を伸張し、財政を整理して國力の充實を圖り、人權を伸濶し、教育を奬勵し、民業を振興して、以て維新中興の大業を完成し、以て皇室の尊榮を宣揚し、人民の權利幸福を增進せんよとを期するよ在り、今や内外多事、國家の急務千百管ならずと雖も、大綱一たび振はゝ細目從て舉らん、吾人又何ぞ多きを望まん乎。

維新以來已よ三十年、大久保甲東の所謂大業完成の期よ達せり、然るよ中興の丕基果して成就したる乎、當時元勳今や多くは逝き、他の陪伴倫功の徒、唯り意氣揚々として、一世の榮華を貪ぼり、或ものは侯爵となり、伯爵となり、子男爵となり、或ものは大勳位となり、二三位となり、四五位となり、菊花大綬章を初め、有もる榮勳五冠を帶ふし、入ては國家の樞機を握り、出ては社會の重望を負ひ、一代の富貴榮華、悉く彼等の身邊よ集れり、則ち勤王擾夷の好題目を唱へて、德川天下を轉覆したる薩長土肥人は、其功名利達豫望の外よ出でたるなるべしと雖も、維新中興の眞目的は果して貫徹されたる乎、社稷を泰山の安きよ置き、皇室の尊榮金甌無欠なるは、是皆 列聖の遺烈と今上の美德とよ依る、唯り國民の權利義務は果して豫期の如く增進したる乎、國家の權威は果して海外に震耀したる乎、東洋の平和を安全よし、東亞大陸よ文明を宣傳するを得たる乎、國防の完實富國の經營、教育實業の發達亦た遺憾なきを得たる乎、抑又た「廣く會議を起し、万機公論よ決する」の聖詔を完行するを得たる乎、憲法は已よ制定進られ、議會の召集業よ十回よ及ぶと雖も、閣臣有司尚ほ因襲を悔めず、毎に万機公論に決するの聖謨よ違ひ、或は言論集會の自由を抑制し、或は壓りよ帝國議會を解散し、往々神聖なる憲法を蹂躙するよあらずや、今や海南万里よ新領土を拓き、膨脹的日本の一着歩を進め、卿か北門樺太を失ふたるの恥辱を雪きたりと雖も、皇化未だ治からずして匪徒數々蜂起し、叡慮一日も安からざるよあらずや、顧ふよ維新の鴻業を完成し、中興の聖謨を翼贊せんと欲せば、即ち正よ責任内閣の實を擧げ、外交を刷新し、軍備を整頓し、行政改革、官紀振肅、財政整理、人權伸濶及び教育實業の奬勵を努めざるべからず、是れ河北新報か將來大よ力を致さんとするの綱目なり。

顧みて河北諸州の形勢を看れば、俯仰感慨よ勝へざるもの多し、政治社會よ在ては尚ほ薩長人士の跳梁跋扈を傍觀するのみよして、未だ曾て政權よ指を染めし事なく、平泉の古英雄、瑞鳳山上の獨眼龍、抑も又た會津城外よ眠れる維新の諸壯士よ對しても慚愧措く能はず、今の河北男子たるもの、何ぞ奮起一番天下の事よ志ざさゝる乎眼を轉じて實業社會を觀察すれば、耕耨し得べきの沃土多くして未だ耕耨せず、開拓し得べきの廣野多くして未だ開拓せず、山の産源の寶河北人士の採るよ委せありと雖も、未だ進て採るものなく、交通運輸不便にして、商工の事業振はず、恰かも河北の土地は天然の寶庫、他の來りて開取するものあるを待つよ似たり、河北新報が青葉城下よ蹶起して實業社會を鼓吹せんとするは、豈偶爾ならん乎。

嗚呼親愛なる河北人士よ、河北新報は毎よ卿等の益友となり、大よしては國家の進運を圖り、小よしては河北の進歩を扶けんが爲よ生れたり、若し河北新報の言說採る所あらば幸よ採れ。

雜報

○奉弔

皇太后陛下には聖體中より御風氣の氣味ありて新年拜賀の禮をも受けさせはず御療養中なりしが去八日に至り突然御容態に御變症あり其後御案過宜しからず遂よ去十一日午後六時を以て崩御遊ばされたり大悲寧よ大僧寧よ人臣たるの情よ堪へず謹て哀悼の意を表するの他なきなり

△國母御準德　皇太后陛下天寧御聽助兼ねて貞然淑德よ富ませ玉ふ　陛下御名を厥子と稱し奉り故貴一位九條尙忠公の第六女天保四年癸巳十二月十四日を以て御降誕あらせられ本年六十五才よ在ませり夙に御才貌双絶嘉永元年戊申十二月十五日御輦十六にて入內先帝孝明天皇の皇后よ册立せられ玉ふ平素御倫德厚く宮女を督して養蠶手藝の事に慰み玉へり其洋風の裝束を慕よ禁じ玉ひたる如き御儉質の聖恣なる一班を窺ひ得べし

△御爭續取調　國母陛下の御聖德は畏くも上に記し奉る如し宮廷に於ては其御事績を永遠に保遺せん爲め特に都築圖書頭よ命せられ其取調よ從事せしめられしが去十三日を以て全く竣業したりと承る

△兩陛下御孝道　天皇　皇后兩陛下には國母御危篤の報に接し玉ふや痛く宸襟を惱まし玉ひ兼て御風氣にて御引籠り中なるにも拘らず御同列にて直よ青山御所へ行幸あらせられ市民何れも御孝道の程感泣し奉りしが天無情遂よ崩御の報を傳ふるよ至りしかば兩陛下の御悲嘆一方ならず　天皇陛下には恐れ多くも御手づから御大棺よ觸るゝ御準備を御指揮遊ばされつゝありと承る孝は天子より庶人よ及ぶ是れ豈よ國民の則るべき所よ非ずや

△東宮御全孝　皇太子殿下には國母より御異例よて沼津の御別邸よ轉地御療養中今回の御凶報よ接せられ早速御還啓仰せ出されしも御全治よ近き今日烈寒を冒して御還啓相成る事は今後の御病体よも關する事と云ひ　天皇陛下より御還啓御差止めの仰せありしを以て一先つ御見合せの事よ決し玉ひ毎日二回つゝ御代理を差遣され奉悼の御意を表し玉ふと云ふ殿下の御孝行時ありながら恐縮の至りなり

△御親電　國母陛下崩御遊ばさるゝや　兩陛下には去十二日各國帝室に對して

興の眞目的は果して貫徹されたる乎、社稷を泰山の安きよ置き、皇室の尊榮金甌無欠なるは、是皆 列聖の遺烈と今上の美德とよ依る、唯り國民の權利義務は果して豫期の如く增進したる乎、國家の權威は果して海外に震耀したる乎、東洋の平和を安全よし、東亞大陸よ文明を宣傳するを得たる乎、國防の完實富國の經營、教育實業の發達亦た遺憾なきを得たる乎、抑又た「廣く會議を起し、万機公論よ決する」の聖詔を完行するを得たる乎憲法は已よ制定進られ、議會の召集業よ十回よ及ぶと雖も、閣臣有司尚ほ因襲を悔めず、毎に万機公論に決するの聖謨よ違ひ、或は言論集會の自由を抑制し、或は壓りよ帝國議會を解散し、往々神聖なる憲法を蹂躙するよあらずや、今や海南万里よ新領土を拓き、膨脹的日本の一着歩を進め、卿か北門樺太を失ふたるの恥辱を雪きたりと雖も、皇化未だ治からずして匪徒數々蜂起し、叡慮一日も安からざるよあらずや、顧ふよ維新の鴻業を完成し、中興の聖謨を翼贊せんと欲せば、即ち正よ責任内閣の實を擧げ、外交を刷新し、軍備を整頓し、行政改革、官紀振肅、財政整理、人權伸濶及び教育實業の奬勵を努めざるべからず、是れ河北新報か將來大よ力を致さんとするの綱目なり。

顧みて河北諸州の形勢を看れば、俯仰感慨よ勝へざるもの多し、政治社會よ在ては尚ほ薩長人士の跳梁跋扈を傍觀するのみよして、未だ曾て政權よ指を染めし事なく、平泉の古英雄、瑞鳳山上の獨眼龍、抑も又た會津城外よ眠れる維新の諸壯士よ對しても慚愧措く能はず、今の河北男子たるもの、何ぞ奮起一番天下の事よ志ざさゝる乎眼を轉じて實業社會を觀察すれば、耕耨し得べきの沃土多くして未だ耕耨せず、開拓し得べきの廣野多くして未だ開拓せず、山の産源の寶河北人士の採るよ委せありと雖も、未だ進て採るものなく、交通運輸不便にして、商工の事業振はず、恰かも河北の土地は天然の寶庫、他の來りて開取するものあるを待つよ似たり、河北新報が青葉城下よ蹶起して實業社會を鼓吹せんとするは、豈偶爾ならん乎。

嗚呼親愛なる河北人士よ、河北新報は毎よ卿等の益友となり、大よしては國家の進運を圖り、小よしては河北の進歩を扶けんが爲よ生れたり、若し河北新報の言說採る所あらば幸よ採れ。

○弔電

國母崩御の報兆悉懼措く能はざりしが去十二日より五日間廢朝仰出されたり（宮内省告示第二號）

白石眞田　霧華

披露の條

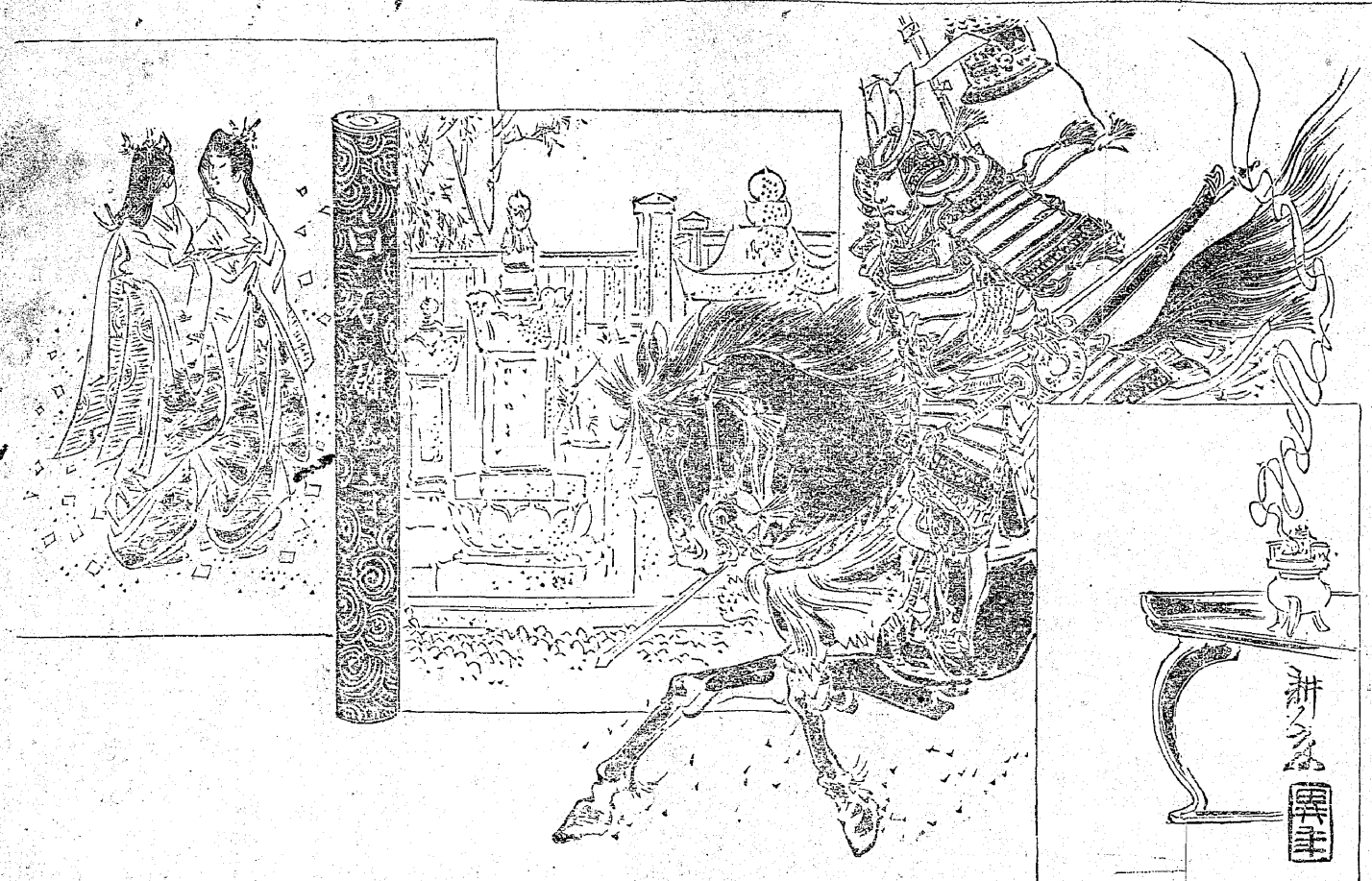
憶へば去年の春よて有りき、予は獨り白石邸所なり、石碣苔蒸して木立深く啼禽幽聲を傳へて予をして轉た懷古の情に堪ざらしむ

翻みて四邊に問へば桃李言はず春幾度か暮れたる、伴僧告けて曰く君は是れ片倉二代の小十郎重長弁よ其の墓と、予は但回去る能はざるもの良久し、聊か三百年の昔よ溯りて當時の有樣想ひ起せば九泉の下猶ほ其の人の聲あるを覺ゆるなり

晁よ元和乙卯歲、大坂落城の秋、彼は什麼よ美譽を後世よ殘せしかを

去る程よ重長當年十七歲、與州一万八千騎の先陣と爲り城際近く攻め寄つて勝田山の麓よ至りけり、時よ五月五日の夜亥の刻よ過ぎければ半月朱よ蹴よ傾いて五月雨空の星影暗く陣屋々々の篝火炎焔天を焦しけり何時しか明くる夏の夜や山里遠く鳴く鷄の聲も靜けきほの〳〵明、勝田山の巓、人馬俄よ騒よ〳〵敵よ近しと呼はる聲すさまじ、素破敵こそ御參なれと重長馬よ鞭打つて鐙の袖搔のけ〳〵山上差して進み行く、彈丸は雨と注き硝煙雲と漲り人馬影無く刀の光のみぞ閃めき渡る、流をいは血か築くは屍か、最早亂軍とは爲りみけるなり

敵は偕て城方よ其の人有りと聞にし眞田の手の者後藤又兵衛、重長直叢地よ互り合つて唯た一撃を擊つ、又兵衛有撃に堪り兼ねて馬より落つ、重長首打ち取らんとす、敵方淵田隼人駈け來つて助く、重長離みて此方よ對ひ彼方よ向ひ遂よ首打つ暇無くて二人とも取り逃したるこう無念なれ、折柄敵の軍勢俄よ振ひ味方負色よ爲つてぞ見にたりける、重長怒くと見るよりも馬の太腹一蹴り蹴つて無二無二よ割つて入り敵の三人四人切り捨て〳〵隼人よ淵つて遂よ斃す、殘る者どもも逃げ迷ひて木の葉の散るよ似たりけり、重長優然として引き返す有樣勇ましかりける次第あり

此の日眞田大助方よ使者あり、重長の陣屋よ至り私よ申し入るゝやう、父幸村寄小十郎殿へ御懇意申し置き候處落城よ近きに有りと覺に候へば最早我等よ討死を存じ候得共妹すや朝來御邊のおん働き天晴武士よ耳奉りておん交りの好み何卒御助命の程おん引請はれ給はゞ及ぶ事爾り

一月十五日編輯局の窓の下よ　露華識